

性規範の変容とHIV感染リスク

—北タイ女性工場労働者の事例から—

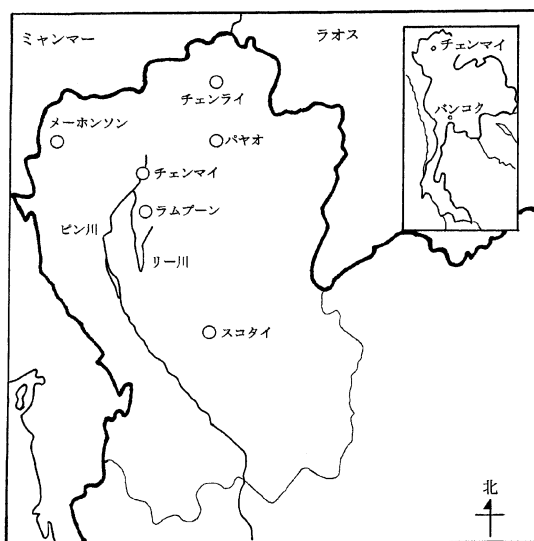
道 信 良 子

1. 序論

1-1. 問題の設定

本稿では、北タイの工業団地で働く女性工場労働者が、北タイ農村の「伝統的な性規範」とは異なる独自の性規範に従い異性との婚前性交渉をもっていることを明らかにし、その婚前性交渉において彼女たちの HIV 感染リスクが生じていることを論じる。議論の対象となる女性たちは、北タイの商業都市チェンマイに隣接する H 工業団地で働く独身の若年女性たちである (図 1 参照)。

図 1 北タイ



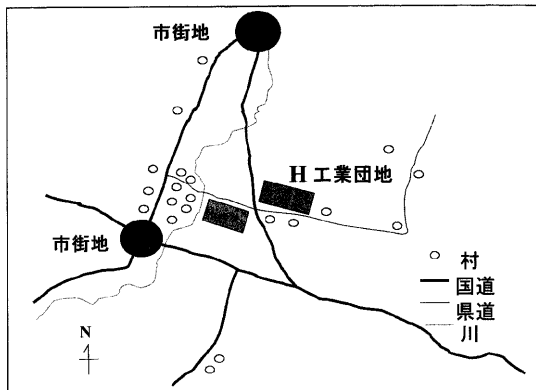
彼女たちを取りあげた理由には二つある。一つは H 工業団地が位置する L 県を統括する保健センター (以下 L 保健センター) の報告で、彼女たちの HIV 感染率が高まっていることが指摘され、感染の拡大を抑制するための緊急の対策が求められていることである。L 保健センターによると、H 工業団地で働く工場労働者の HIV 感染率の推計値は 1999 年 12 月現在、約 3% であり、この数字はタイ国全体の HIV 感染率推計値の 10 倍に達する。H 工業団地で働く工場労働者の 70% から 80% は女性であり、その過半数は若年の独身女性である。工場で働く若い独身女性の HIV 感染の高まりは、この地域における重大な健康問題となることが、L 保健センターによって指摘されている¹⁾。

女性工場労働者を考察の対象とするもう一つの理由は、彼女たち独自の性規範を吟味することが、タイにおけるこれまでの画一的な性規範の議論を再考する契機となると考えられることである。タイにおけるジェンダーとセクシュアリティ研究において、男女のセクシュアリティは「性のダブルスタンダード」の概念で分析され、論じられることが多かった。しかし、現代のタイ社会において若い男女のセクシュアリティは多様化しているのであり、「性のダブルスタンダード」によって一元的に論じることはできない。これについては「性のダブルスタンダード」の概念の説明と併せて、次章の「性のダブルスタンダード」において詳しく論じることとし、以下では先ず、H 工業団地設立の歴史的背景、団地が位置する L 県における HIV/AIDS の現状、そして H 工業団地における HIV 感染予防活動について簡単に述べる。

1-2. 問題の背景

H工業団地は、1980年代半ばから、タイ政府によって進められた地方経済振興政策の結果、急速に工業化した地域に位置する。その地域のなかでも交通の便の良い二つの市街地の間にある（図2参照）。

図2 H工業団地近辺図



工業団地の地方分散はタイ政府が主導する地方経済振興政策の一つの要であったが、その先駆けとして1985年、H工業団地が設立された。1999年12月には、約62社がこの団地で操業し、その半数は電子・電気機器関連の日系企業である。1999年12月現在のH工業団地全体の雇用者数は2万9494人であり、そのほとんどは北タイの出身である。首都バンコクにおける工業化と同様に、H工業団地の設立は農村の若者の大規模な出稼ぎを促した。団地近辺では、団地で働く工場労働者のための寮や飲食店、娯楽施設などが建設され、都市郊外の地域としては独特の様相を見せている。しかし、多くの住民は今なお農業に従事しており、出稼ぎ労働者

の出身地と同様の生活習慣や価値観を保持している²。

なお、1980年代から現在までのタイにおける工業化政策は外国企業からの投資に大きく依存しており、H工業団地も日系企業を初めとする外国企業の生産拠点となっており、日本との係わりも深い地域である。

工業化が進む一方で、H工業団地はL保健センターのHIV/AIDS対策重点地域に指定されている³。北タイでは、1990年代初頭に女性性産業労働者の中でエイズが蔓延し、その後、その顧客である一般の男性からその妻や恋人である一般の女性、そしてその子どもたちへと感染の波が広がっている。北タイ感染症管理センターによると、L県は人口10万人当りのHIV感染者とAIDS患者数が北タイ地方のなかでも最も多い県の一つであると報告されている（CDC 10 1999）。

工業開発と共にHIV/AIDSの蔓延も見るという特殊な地域であるH工業団地に、北タイの農村や、遠方からは東北タイや中央タイの農村からも多くの若い女性たちが工場労働者として出稼ぎに来ており、L保健センターを初めとするHIV感染予防対策を施行する機関では、彼女たちのHIV感染リスクの高まりを懸念し、工業団地におけるHIV感染予防教育を実施してきた⁴。しかし、その多くはコンドームによる感染予防を工場労働者たちに徹底させることを目的としたものであり、いくつかの問題をもっている。これについては、本稿の第6章第2節「H工業団地におけるHIV感染予防対策の諸問題」において詳しく論じる。

以下に続く議論ではまず、先行研究においてタイの人々の性規範がどのように論じられてきたのかを、タイにおけるジェンダーとセクシュアリティの文化人類学の大きな流れに位置づけて概観し、本論における「性規範」の概念を明確にする。次に、現地調査の分析結果の具体的記述に入るが、第一に、研究の方法論と分析の手法について説明する。第二に、女性工場労働者たちに独自の性規範を創出させる二つの対立する女性像の分析と、彼女たち独自の性規範の中心概念である「独占的愛」の概念について説明する。第三に、女性工場労働者たちの婚前性行動がどのように「独占的愛」の思想に導かれているの

かを分析し、最後にその思想と彼女たちの HIV 感染リスクとの係わりについて論じる。

2. 性のダブルスタンダード

タイにおけるジェンダーの民族誌やジェンダー研究において、男女に異なる規範が要求される男女間の性のダブルスタンダードと、それを両立させるために女性の性のあり方を二元化する女性に対する性のダブルスタンダードが、タイの人々の性規範に係わる記述と議論の中核をなしてきた (Boonchalaksi and Guest 1994; Bumroongsook 1995; Ford and Koetsawang 1991; John Knodel et al. 1996; Muecke 1992; Muntarbhorn et al. 1990)。ここでいう性規範とは、人々の性的指向、性的意識、性的行動のあり方について社会が定めた規範である。男女間の性のダブルスタンダードは、女性には結婚までは性交渉を行わず、結婚後は夫である男性とのみ性交渉を行うことが要求されるのに、男性には複数の女性との豊富な性経験が期待されるという矛盾を内包する。しかしその矛盾は、結婚までは処女で結婚後は夫以外の男性とは性関係をもたない女性と、婚前、婚外に拘わらず複数の男性と性関係をもつ女性とに女性を二分する規範があったことで、解消されていたと考えられる (Ford and Koetsawang 1991; Muecke 1992)。タイ社会の長い歴史において、タイの人々は売春業に従事する女性たちを後者の典型として表象し取り扱ってきた。そしてそれ以外の女性たちには生涯一人の男性と性交渉をもつことを期待した。

タイや他の東南アジア諸国を研究対象とする文化人類学において、「ジェンダー」と「セクシュアリティ」に係わる問題は1980年代まではあまり重要視されてこなかった (Atkinson and Errington 1990)。文化人類学者のアイワ・オング (Aihwa Ong) とマイケル・ペレツ (Michael Peletz) によると、1980年代以前に執筆された東南アジアの民族誌の多くは、「この地域における男女関係が日本や中国などの東アジア諸国に比べてより平等であり、家庭内における性別役割も補完的であった」と論じており、女性の社会的地位の高さを強調してきた (Ong and Peletz 1995, p. 7)。

しかし、1980年代からの西洋近代化と工業化の波を受け、東南アジア社会も大きく変容し、これまで比較的平等で補完的であると論じられてきた男女関係も、文化人類学者によって再検討されるようになる (Ong and Peletz 1995, p. 8)。たとえばタイにおいては、ジェンダー役割や男女の社会的地位に議論を限らず、性規範、性行動、性意識などのセクシュアリティに係わる現象も射程に入れた「ジェンダーとセクシュアリティ研究」が欧米やタイの文化人類学者の間で盛んに行われるようになった。

1980年代以降のタイにおけるジェンダーとセクシュアリティの文化人類学は、次の二つの潮流に大別できる。一つは、「女性と開発」の分野における研究であるが、「タイの経済開発は女性の労働を搾取し女性の身体を商品化した」という前提に立ち、現代タイ社会における女性の社会的地位の降下をタイの経済開発との関係で論じた研究である (Truong 1990; Van Esterik 1991)。今一つは、エイズ研究に位置づけられるものであり、「タイにおけるエイズ蔓延は男性の婚外性交渉や買春を容認し性産業を温存するタイ社会の性規範にその一因がある」と論じ、タイの人々の性行動や性意識を詳細に検討した研究である (Boonchalaksi and Guest 1994; Ford and Koetsawang 1991; John Knodel et al. 1996; Muecke 1992)。

エイズ蔓延を契機に盛んになったこの後者の研究は、タイの人々の性規範を吟味することから始められたが、その多くは男性と女性にそれぞれ異なる規範を課した性のダブルスタンダードに着目した (Ford and Koetsawang 1991; Muecke 1992)。

しかし、これらの研究において、性のダブルスタンダードの歴史的な成立の過程や地域的特殊性、あ

るいは現代社会における編成の過程は問題にはならず、性のダブルスタンダードは非歴史的で一元的な概念と見なされてきた。そのために、「伝統的な規範」も現代の文脈で、人々によって新たな意味を加えられたり再解釈されながら微妙に変化するものであることを見逃してきた。それゆえに、その一元的な性のダブルスタンダードから微妙にずれた性行動を行う現代の若い女性たちのセクシュアリティと HIV 感染リスクを論じることができなかった⁵。

本論では、若い女性たちの間で生成する独自の性規範を分析するために、「性規範」を次の二つの側面に区別して考える。その一つは、特定の社会において人々が歴史的に定めた規範である。今一つは、個人が内面化した規範であり、個人の性的指向、性的行為、性的意識などを規定する。社会の成員が一樣にその規範を内面化すればそれは「共有」されている。しかし実際には、社会が定めた性規範を個人が内面化し自己のものとして生成する過程において、個人はその規範を問い直したり、その規範から微妙にずれたり、さらにはその規範を自分に有利なように再解釈することもあり、自己の規範として生成されたものは多様で可変的である。性に係わる規範がさまざまに創出されている現代社会においては、同じ社会内でも個人が選択する規範は集団や個人によって異なり、それぞれが微妙に異なる規範を生成することもある。

このような視点に立ち、本論では、女性の性意識や性行動を定めようとする社会の規範と、女性工場労働者たちが生成する独自の性規範とを比較検討する。そして、その規範のずれから HIV 感染リスクがどのように生じているのかを分析する。但し、本論の目的は、女性工場労働者一人一人の性規範の違いを列挙して示すものではなく、女性工場労働者たちの多数が合意する性規範が北タイ社会で定められた性規範とどのように異なっているのかを論じるものである。したがって、個々のレベルにおいても微妙に異なると考えられる性規範は本論においては考慮しないことにする。

3. 方法論

資料 資料は、1997年6月から1999年12月までに合計13ヵ月、北タイL県のH工業団地とその近郊で収集した。収集の方法は、定性調査と定量調査を統合したが、本稿では定性調査のデータから導き出された結果を論じることとし、定量調査を併せた分析は別の機会に譲る。定性調査では、女性工場労働者96人と男性工場労働者28人との個別インタビュー、団地近辺の寮と工場における参与観察、政府と非政府団体のエイズ対策担当者との個別インタビューを実施した。

分析 個別インタビューはすべてテープに録音され、テープ起こしされたテキスト（インタビューの語り）は The Ethnograph v5.0 (Scolari, Sage Publications Software, Inc. 1998) という定性調査の分析ソフトで分析された。テキストは一定の意味をもつ部分毎にコード化（その意味を端的に示す指示語をつけること）され、コード毎にテキストの内容が分析された。さらに、そのコードを序列化したり分類したりすることで、コード間の意味の繋がりや構造も分析した。分析結果の記述の方法としては、語りを細かく提示する方法を取らず、分析から導き出された主要なテーマについて詳しく述べることを心がけた。

対象者のプロフィール 女性工場労働者96人のうち、未婚女性62人が本稿の考察の対象となる。既婚者についての詳細な検討は別の機会に譲る。62人の未婚女性の平均年齢は23.3歳（最低年齢17歳、最高年齢33歳、中央値23歳）である。彼女たちのほとんどは就学6年間の中等教育の前期3年を終えてお

り、6年間すべて終えている人も過半数いた。H工業団地にはさまざまな業種の工場が操業しているが、電子・電気機器関連の工場は全工場数の58%を占める（H工業団地管理局 1998）。インタビューを受けた女性の過半数はこの業種で働いていた。62人のうち58人は北タイの出身で、東北と中央タイの出身の人はそれぞれ2人ずつであった⁶。出稼ぎの理由としては、家族への金銭的援助が主たる理由であった。しかし、数人を除くほとんどの女性は、工業団地で長く働く意思はなかった。彼女たちは、家族の金銭問題が解決したり、将来独立して商売を始めたり、専門学校や短期大学に通うための資金ができれば帰郷する予定であった。

4. 変容する性規範

本章では、第2章で論じた性規範の分析枠組に従い、北タイ農村における「伝統的性規範」と、H工業団地における二つの女性像の対立、そして女性工場労働者たちが生成する規範を分析する。

4-1. 北タイ農村の「伝統的」性規範

H工業団地近郊の農村や女性工場労働者たちの親族が住む農村を訪ね、彼女たちの祖母や母の世代の女性たちに昔の男女の婚前関係について尋ねると、ほとんどの人が「昔の若い女は、結婚までは純潔 (*khwaam boorisut*) を守った」と語る。純潔とは、男性との性交渉の経験がないことを一般に指すが、ここでは手を触れることや肩を寄せることなどを含むあらゆる身体的接触をもたないことを意味する。その女性たちが思春期だった頃は、親族以外の男性とは常に一定の距離を保ち、直接顔を見ることや話しかけること、そして隣に座ることも避けたものだという。男性の行動について尋ねると、男性は思春期になると家を空けて友人と一緒に過ごすことが多く、隣村へ遊びに行ったり売春宿を訪れたり、「若い男のすることは昔も今も変わらない」と語った。

このように女性の純潔を重んじ男性の放縦を容認する性のダブルスタンダードが、北タイ農村の人々をもつ「伝統的性規範」である。このダブルスタンダードは、北タイに限らずタイの広い地域で見られる規範であるが、北タイ農村の人々は女性の婚前性交渉を禁じる規範を、北タイに独特な信仰の一つである母系制祖霊崇拜との係わりで説明することが多い。

このことを理解するために、先ずタイの人々の信仰体系について述べておく。タイの人々の信仰体系は、上座仏教、バラモン教、精霊崇拜の三者の複合体である。精霊崇拜はタイに仏教やバラモン教が広まる以前から人々がもっていた最も原初的な信仰である。仏教とバラモン教が政治性を帯びて民衆の間に広く浸透するにつれ、精霊崇拜は各地で弱まってゆく。しかし、北タイの農村では、祖霊が母系の祭祀集団によって今日でも祀られており、祖霊崇拜は北タイ農村の人々の信仰体系を形成する重要な要素である。

その母系の祖霊はピープーニャーと呼ばれ、母屋の一角に祀られ、病気や事故などの災いから家族を守ると言われている。祖霊祭祀を司るのは女性であり、女性の祭主を中心に、母系の親族が祖霊集団を構成する。祭祀を司る権利は母系的に継承される。後継者は祭主である女性とその配偶者の老後の世話を担う末娘であることが多く、家屋敷の相続権も継ぐ。

娘が思春期になると母や叔母は祖霊が家の女たちの身体に宿っていることを伝える。そして婚前に男性と性交渉をもったり、身体に触れることを許せば、祖霊を怒らせ、家族の誰かが病いに倒れると教え

る。祖霊の怒りを静め、家族の成員に危害が及ぶのを防ぐには、娘の家族は娘と性的関係をもった男性に罰金の支払いを命じ、豚の頭と酒を祖霊に捧げなければならない (Davis 1984, p. 266)。この償いの儀礼を「祖霊を祀る」(siiapii) と言う。北タイの農村の人々は、女性の婚前性交渉を「祖霊を祀る」と呼び、絶対にあってはならないことだと娘たちに言い聞かせる。

この祖霊崇拜は、北タイ農村に広く見られる妻方居住婚と相互に係わっている。北タイの農村では、ある家族の女性と結婚した男性は、結婚後はその女性の実家に同居し、その後独立して同一屋敷地内に新居を建てて共住するケースが多く、女性側の祖霊集団の一員となる。女性の親族は、相互依存的な関係を生涯維持する傾向があり、1970年代に北タイ農村で調査を行った Sulamith Potter (1977) は、このような北タイの親族構造を「女性中心の構造」(female-centered system) と論じた。これが母系制と異なるのは、家族の財産は子どもたちに均等に配分され、娘の一人が独占するということはないからである。末娘が家屋と屋敷地を相続することが多いのは、上の兄弟が先に親世帯から独立したからであり、初めから相続権を有しているわけではない。したがって、「女性中心の構造」というのは、祖霊集団の構成と結婚後の居住規制が女性の親族を結束させていることを表した概念である。

今では個人が所有する土地も限られるようになり、家族の成員が県外で働くことも増えたことから、妻方居住をとる家族は減ってきている。しかし、女性が結婚後も実家との相互依存関係(たとえば、母が娘の子どもの養育を引き受け、娘は外で働き母へ仕送りをするような依存関係)を保っているケースは多い。

親族構造が女性中心であっても、北タイにおける女性の社会的地位は決して高くはなく、村の行政や仏教の祭祀を司るのは男性であり、村落レベルでの女性の発言権は限られていた。しかし祖霊崇拜と妻方居住は女性の親族の結びつきを強め、女性の立場をある程度高めていたと推測できる。

女性の性に関しても、祖霊崇拜が未婚女性の性を管理する機能をもっていたとしても、女性の性を抑圧しているわけではないと考えられる。祖霊崇拜は未婚の女性の身体に触れた男性を「償いの儀礼」で処罰し、男性にその後の責任を取ることを要求する権利を女性の家族に与えていると解釈できるからである。祖霊集団は若者の結婚に対する発言権をもっており、結婚を女性側に有利に導くこともできたのではないかと考える⁷。

現代の北タイ社会では、婚姻後の居住形態も多様化し、母系集団を維持する機会も少なくなった。都市で生活する若い女性たちの中には祖霊など信じていないという人が多い。しかし、北タイの農村に住む人々は今日でも祖霊崇拜との係わりで「伝統的性規範」を認識しており、女性の性行動を規制することは女性の身体と名誉、さらには家族と祖霊の名誉を守るといった肯定的な意味を持つと考えている。

4-2. 対立する女性像

H工業団地では、互いに対立する二つの女性像が女性工場労働者の婚前の性的行動を定めようとする。それは、流行の洋服や化粧品を身につけたり、男性とリゾートへ旅行することを楽しむような「近代的な女性像」と、それを批判的に表象する「ふしだらな女性像」である。

ファッション雑誌、テレビ、広告、映画などの娯楽メディアにおいて生産され発信される「近代的な女性像」は西洋若者文化の影響を強く受けたものであるが、現代のタイの若い女性たちのセクシュアリティを大きく変容させている。それは、現代タイ社会における「女性の美しさ」の基準の変化と共に起きている。

文化人類学者のメアリー・ミルズ (Mary Mills) が *Thai Women in the Global Labor Force* において指摘するように、娯楽メディアは「女性の美しさ」の新しい基準と価値観を若者に伝えている (Mills 1999, p. 105)⁸。それは、女性の行動の慎ましきや謙虚さに「美しさ」の価値を置くのではなく、都市の消費文化に積極的に参与することにある。たとえば、トップモデルや人気映画女優から流行のヘアスタイルや化粧の仕方や洋服の着こなしを見て学び、それを模倣することは娯楽メディアが生産し発信する「近代的女性の美しさ」を消費することの端的な例である。また、H工業団地で働く女性たちが休日に、肌を露出するようなノースリーブの上着やタンクトップを身につけて、ショッピングモールやナイトクラブやディスコに出かけて楽しむことは、「近代的な」自己表象の一つの方法である。

娯楽メディアが生産する「近代女性像」は、「近代性」に憧れる工場の若い女性たちを魅了する。しかし、「伝統的な性規範」に捕らわれず肌を露出したり、ファッションモデルを真似て身体を派手に着飾ることにお金を費やすことなどは、北タイの農村における「女性の慎ましきの価値観」とは根本的に対立するから、「近代女性像」を模倣する若い女性たちの行動は農村の人々の批判を呼ぶ。女性が肩、腕、首周りなどを露出することは男性の性的欲望を喚起し、性行為を連想させるような「ふしだらな」行為と見なされ、そのような衣服を着て男性と一泊旅行に出かけることなどは親密な性的関係にあることを示唆する。工業団地近辺に住む村人たちは、これらの行為はすべて若い女性が従うべき性の規範を破る行為であるとし、村の男女関係の秩序を乱すものと非難する。村人たちにとっては、若い女性が団地に出稼ぎをすることで獲得した「近代的女性らしさ」は「性的にふしだらなこと」とコインの裏表のように並存している。

若い女性の「出稼ぎ」は、彼女たちが「近代的女性らしさ」を追及しなかったとしても否定的に論じられる。たとえば、若い女性が農村を離れて団地で寮生活をするのは、生活環境の物理的変化のみを意味するのではなく、農村では得ることのできない新しい知識や経験を身につけることを意味する。これには、婚前性交渉も含まれる。タイでは、「旅をする」(*pai tiaw*) という語は、県や地方を移動する旅だけではなく、近くに「遊びにゆく」とか「売春婦を訪れる」ことを指す場合もある。北タイでは女性が家の中に監禁されたり村から出ることを禁じられるということは昔から行われなかったが、女性は出生地やその近辺に生涯住むことが多く、故郷を遠く離れて旅することは男性的な行動だと見なされる。さらに旅をすることで、旅の途中で出会った男性と性交渉をもつ可能性も高まる。旅の途中では、家族と祖霊の保護も弱まる。これらのことから、若い娘が工業団地に出稼ぎをして新しい性の価値観を身につけ、異性との性交渉をもつことを、農村に残る両親は懸念し、団地近辺の村人たちは批判する。

工場の女性たちのセクシュアリティを否定的に表象するもう一つのグループは工場の男性たちである。彼らは、工場の女性たちを「団地の若い女」(*saw nikhom*) と呼び、「迷い鳥」(*kai long*) というもう一つの蔑称と併せて、異性との婚前性交渉をもつことに積極的な女性のことを指す呼称として広く使用している。工場の男性の多くは、女性工場労働者の性行動は活発できわめて軽率だと考えている。たとえば、彼女たちが仕事の後に男性を誘いお酒を飲みに行くことやその後バイクで寮まで送るよう頼むこと、さらにはノースリーブのシャツを着て男性の性欲を掻き立てるような行為をすることを指摘する。

工場の男性たちは工場の女性たちの性行動に否定的なイメージを抱いている。しかしその一方で、彼らのなかには彼女たちの身体を「快楽の性の対象」と見なし、積極的に性交渉をもとうとする人も多い。たとえば、工場の若い未婚男性の多くは、結婚への憧れはなく独身生活を楽しまたいと考えている。彼らは、両親の監視が充分に行き届かないところで寮生活をして比較的自由な環境にある工場の女性たち

を、不特定多数の交際相手の一人として簡単に接近できる相手だと考えている。また、性交渉をもったとしても、団地の事情が良くわからない女性の家族から罰金の支払いや結婚を要求されることはない。さらに、団地における女性の数が圧倒的に多いことは、女性に接近する可能性を高めるという点で、男性にとって有利なことだと考えられている。「団地では遊び相手は何人でも交換可能」と、彼らは語る。

北タイでは、チェンマイの女性性産業労働者の間にエイズが蔓延したことがあり、若い男性が婚前性交渉や不特定多数の性の相手として、性産業に従事していない女性を選択し始めていることもエイズ研究者やエイズ対策機関の報告で明らかになっている⁹。その報告によると、若い男性の多くが「女性工場労働者は婚前性交渉を活発に行っている、女性性産業労働者よりも感染リスクが低い」と考えている。以上述べてきた二つの女性像の狭間で、女性工場労働者がどのように自己のセクシュアリティを形成しているのかについて次節で論じる。

4-3. 変容する性規範

賃金労働者となり経済的に自立した工場の女性たちは、工業団地で拮抗する女性像に出会う。娯楽メディアは、流行の洋服を着こなし異性と交際も活発に行う女性を「近代的な女性」として称賛し、若い女性の婚前性交渉も是とする。一方、団地近辺に住む村人にとって村の男女関係の秩序が出稼ぎ女性たちによって乱されて行くのは耐え難いことであり、若い女性が夜間に男性と外出したり同棲する行為を批判する。工場の男性は彼女たちの性行動を否定的に語りながらも、「快樂の性の相手」として彼女たちを選択する。

「近代的な女性」と「ふしだらな女性」という対立する女性像が作り出されている工業団地において、若い工場の女性たちは自己の性規範を自分なりに構築しなければならない状況にいる。

彼女たちは婚前性交渉や同棲というこれまで社会的・文化的に禁じられてきた性的関係を容認し始めていることは、工業団地の近辺に住む村人の話だけではなく、筆者が行ったインタビューにおいても明らかであった。しかし彼女たちの性規範は、村人たちが噂するように、出稼ぎの結果、北タイの農村にある「伝統的なもの」から娯楽メディアが表象する「近代的なもの」へと一変したのではなく、「伝統的価値観」と「近代的価値観」との間で彼女たちがより理想的な自己の性を模索する過程で、複雑に生成していた。つまり、彼女たちは、「近代的な女性」の活発な性行動に憧れる一方で、「ふしだらな女性」と批判され「快樂の対象」と見なされることを拒否し、婚前性交渉をもっている農村の人々や工場の男性から批判されることのないような「自己像」を構築したいと考えていた。以下では、この自己像を形成するうえで重要な概念である「独占的愛」(*rak diaw jai diaw*)という概念について説明し、女性工場労働者たちがこの概念に依拠してどのように自分たちの婚前性交渉を正当化しているのかを述べる。

4-4. 「独占的愛」(*rak diaw jai diaw*)の思想

若い女性工場労働者が自分たちの婚前性交渉を正当化する一つの概念であり、自己の性規範を構築するうえで最も重要な概念に、「独占的愛」(*rak diaw jai diaw*)の概念がある。「独占的愛」(*rak diaw jai diaw*)とは、語義通りには「一人の相手に忠実な愛情を寄せること」であるが、「ロマンティック・ラブ」(*rak romeentik*)の思想を含み、さらには互いの性的関係の「独占性」を強調する概念である。

男女の性的関係のあり方を示す規範である「独占的愛」の思想が、性のダブルスタンダードと異なる点は二つある。その一つは、不特定の人々と性交渉をもったり、同時に複数の相手と性交渉をもつよう

な性的放縦性を、女性だけではなく男性にも認めないことである。今一つは、「ロマンティック・ラブ」という西洋近代的な愛の概念を取り入れていることである。ここでいう「西洋近代的な愛」とは、現代のタイの若者世代に西洋の娯楽メディア（洋画や洋雑誌の翻訳）を通じて広く普及している「愛」の概念であり、婚前性交渉に対する評価をある一定の条件のもとに肯定化するものである。ある一定の条件とは、「相互に誠実な愛情をもっていること」であり、性的関係の「独占性」と重なる。

本稿における「愛情」とは「他者との係わりを求める心のありよう」のことを指す。ここで留意すべきことは、女性工場労働者が述べる「愛情」の概念が、男性との性的関係を動機づける肯定的な側面だけではなく、そのありようを規定する強制的な側面も有していることである。つまり、「独占的な愛」とは彼女たちにとっての「愛情の規範」となっている。

若い女性たちの母親世代では、若い女性は男性への愛情を面に出さず、常にそれを抑制するものであると教えられてきた。しかし、現代の若者の世代では、ロマンティック・ラブの思想はメディアを通じて広く普及し、特に婚前性交渉をもっている女性たちの間で顕著である。たとえば、テレビ番組や映画や女性雑誌などの娯楽メディアは互いに親しみあう若い男女が抱擁したり寝室に入る姿を描写し、視聴者や読者にその男女が性交渉をもつだろうことを予測させる。タイで放映されるテレビや映画では、成人映画を除き性交渉そのものの描写はタブーである。しかし、性交渉を示唆する接吻、愛撫、抱擁のシーンは頻繁に現れる。これらの描写において、恋愛関係にある若い男女の性交渉はタブーではないという新しい思想を娯楽メディアは伝えているために、テレビや雑誌に日常的に接する若い女性たちの男女交際への憧れを喚起する。

婚前性交渉や同棲について尋ねると、若い女性工場労働者の多くは決まってこの「独占的愛」の思想を持ち出してくる。たとえば、「結婚前に恋人と一緒に住んでいることについてどう思っていますか」と尋ねると、「結婚する予定があるので特に悪いことだとは思わない」と応える。結婚の予定があるとは、理想的には互いに独占的な関係にあることを示し、彼女たちはそれを信じている。また、「お互いに軽率な気持ちで交際しているのでは決していない」と彼女たちは言う。性的関係の独占性を強調するこれらの語りには、彼女たちの理想とする婚前の性的関係が、単に娯楽メディアで流布される若者文化の模倣ではなく、性のダブルスタンダードが定めた「良い女性」としてのセクシュアリティのあり方を部分的にも保ちたいという願望を含み、形成されていることを示す。言い換えれば、性のダブルスタンダードが定めた「良い女性」の性規範では、女性が不特定多数の男性と性交渉をもつことは禁じられており、これと同一の価値を強調する「独占的愛」の思想は、彼女たちの婚前性交渉を、売春や誰とでもすぐに性交渉をもつような軽率な関係と区別することを彼女たちに可能にさせる。工場の女性たちは、性的関係の「独占性」を強調することで、「工場の若い女性はふしだらである」という団地周辺の村人たちの批判を退け、性のダブルスタンダードが定めた「良い女性像」に可能な限り自己を近づけて表象しようとしている。

次章では、この「独占的愛」の思想が彼女たちの婚前性交渉をどのように導いているのかを分析する。

5. 女性工場労働者の婚前性交渉

筆者が行った女性工場労働者とのインタビューでは、彼女たちの婚前性交渉の多くが同棲関係のなかで行われていることが明らかであった。工業団地では、約2キロ以上離れた農村から出稼ぎをする女性

たちのほとんどが団地近辺の寮に住み、友人や同僚や親戚と数人で四畳半ほどの小さな部屋を共有しているが、恋人と住む場合もある。恋人と共同生活をする女性たちは、「結婚までは性交渉をもってはならない」という従来の性規範を破ることにあまり抵抗はないようであった。同棲に対する彼女たちの意識や態度を細かく見てみると、「独占的愛」の思想が同棲を肯定化し、彼女たちに自信を与えていることが明らかになった。以下では、彼女たちが「独占的愛」の思想をもって同棲をどのように肯定的に説明しているのかを、「結婚を前提とすること」と「試みの期間と見なすこと」の二つの側面から説明する。

5-1. 結婚を前提とすること

第一に、同棲関係にある工場の女性たち（インタビュー対象者62人中10人）は、それが結婚を前提としていることを強調する。また、同棲していない女性のなかにも、結婚を約束した男女の同棲を容認する人が過半数いた。彼女たちにとって、結婚の約束があることはその同棲関係が「独占的な関係」であることを示す。同棲が結婚を予定としていることを示す端的な例に、彼女たちが共通の目標をもって同棲の相手と共に努力することがある。たとえば、結婚式の資金を貯めたり、自動車を購入したり、家具や電気製品や他の高価な品々を手に入れるために一緒に働くことなどである。これには実利的な側面もあり、結婚生活を始めるのに必要な最低限のものを揃えるためにも、結婚の約束を交わした時点で共同生活に入り、家賃や食費を折半する方が経済的である。

北タイ農家の経済状態と彼女たちに課された役割——家族の大黒柱として家計を支えること——を考えると、結婚に備えて同棲することは経済的である。団地へ出稼ぎをする若い女性の多くは決して裕福な家庭に育ったわけではなく、農村に残る家族の暮らしを改善し、自分の将来のためにも貯蓄をするという経済的理由から働いている。彼女たちのなかには、両親の借金を返済したり、弟や妹の学費を稼ぐために3年から6年ほど働く予定の人もいる。家族は自給自足の生活を営んでいるが、自分は農業に従事するのではなく、独立して小さな雑貨屋を営みたいからと、その資金を貯めている人もいる。農村に残る家族の大黒柱となり、自分の将来のために貯蓄をする大切な時期に、彼女たちは急いで結婚することを控えているのである。このように、同棲は、経済的効果を考えた実利的な側面もある。

5-2. 「試みの期間」としての同棲

工場の女性たちのなかには、相手の性格や行動を知り、互いに「独占的な性関係」を形成することが可能かどうかを確かめるために同棲する人もいる。同棲相手が他の女性と性交渉をもっておらず、自分に誠実で信頼できる相手だと思い同棲を始めても、その後も互いに「独占的な性関係」が続くとは限らないと考えているからである。

相手の男性を完全に信頼することができないでいることは、工場の女性たちが次々と同棲の相手を替えてゆく行為に現れている。相手を取り替えるのは、3ヵ月から1年という短期間の間に行われることが多い。このような行為を見る寮の管理人や村の年配の女性たちは、「工場の女性たちの性は乱れている」と批判する。しかし、工場の女性たちにとっては、このような行為でさえも「独占的愛」の思想に基づいている。それは以下のような女性たちのもつ倫理による。

同棲している男性に他の女性がいたり、売春宿に通っていることがわかれば、結婚の約束をしても別れるべきだと、彼女たちの多くは考える。同棲は、結婚前に互いの独占的な関係を今一度確かめる「試みの期間」であり、そうではないことがわかれば、別れるのも仕方がないと彼女たちは考えている。

「試みの期間」に性交渉をもつことはあり、同棲相手を替えたことで結果として複数の男性との性交渉を結婚前にもつこともあり得るが、大切なことは最後に同棲した人と確実に結婚できることだと述べる女性もいた。つまり、複数の男性と同棲をしても、最後に理想の男性を見つけて彼に生涯尽くすことができればそれで良いという倫理観である。これは、一人の男性を配偶者として選択したら、もう他の誰とも性交渉をもつことはないという「独占性」である。この場合、「独占的愛」の思想は、信頼できない相手と別れて、より良い相手を新しく探すことを正当化する。理論的には、「独占的愛」の思想と同棲相手を次々と替えることとは矛盾するが、実際の性的関係においては、後者は理想的な相手を探すための実践であり、前者に導かれていると言えよう。そして彼女たちは決して同時期に複数の男性と性交渉をもっているわけではないから、「性的にふしだらな」ことはしていないと、彼女たちは考えている。

女性工場労働者の多くは、「ふしだらな女性」という否定的表象をされること、「快樂の性の相手」となること、そしてHIV感染リスクというさまざまなリスクに曝されている。彼女たちはこれらのリスクを回避するために「独占的な性関係」を構築できる相手を見定めようとする。恋人の「独占的な愛」を信じる女性たちのなかには、結婚を決心して同棲を始め、共通の目標を立てて共同生活をする人もいる。同棲を始めても男性への懐疑心を持ち、結婚の決断をすることを躊躇する人もいる。彼女たちは同棲を結婚の準備期間というよりも、「試みの期間」と捉え、相手の男性が他の女性と性交渉をもっていることがわかれば、すぐに性関係を解消できるよう自分たちの関係に柔軟性を保とうとする。ここで強調すべきことは、工場の女性たちは、性的経験を積んだり、「快樂」を得るために、同棲したり同棲相手を替えているのでは決してないことである。

6. 女性工場労働者の HIV 感染リスク

工場の女性たちの HIV 感染リスクは、「独占的關係にある」と彼女たちが信じる相手との婚前性交渉において、コンドームによる予防を行わないことで高まっている。工業団地では、1995年頃から、L保健センターとL社会労働福祉センターのエイズ対策室が工場で働く男女を対象にコンドーム推進キャンペーンを行ってきた。しかし、コンドームの使用は工場で働く男女の間に完全に浸透していないことが、北タイ感染症管理センターの報告で明らかになった（CDC 10 1999）。以下では、コンドームによる HIV 感染予防のさまざまな問題について女性工場労働者の立場から述べ、彼女たちの HIV 感染リスクがどのように生じているのかを分析する。

6-1. コンドームの象徴性

女性が男性にコンドームの使用を頼むことが難しい理由の一つに、コンドームは、性産業労働者との性交渉において男性が性感染症を予防するためのものという否定的な意味をもっていることがある。コンドームがこのような否定的な意味をもつのは、タイにおける性感染症対策と家族計画の方針と進め方に一つの問題があったからではないかと考える。それは次のことを意味する。

タイにおいて、性のダブルスタンダードが、女性を「貞潔な女性」と「性的に乱れた女性」に二分していることは先に述べた。この思想においては、「貞潔な女性」は婚姻関係以外の性交渉をもつことはないと仮定されるから、複数の性交渉において広まりやすい性感染症は「性的に乱れた女性」と見なされる性産業労働者とその顧客が雇うものだと、タイでは一般に考えられてきた。女性に二通りの規範を要

求する性のダブルスタンダードの思想は性感染症対策（エイズを含む性感染症）を検討する人々の間にも根強く、性感染症対策としてのコンドーム使用はもっぱら性産業労働者とその顧客を中心に推奨された。エイズが蔓延する以前でも、淋病や梅毒などの性病予防手段としてのコンドームの使用が売春宿を始めとする性産業施設において勧められた。

「コンドームは男性が婚外性交渉で使うもの」という一般的な認識が形成された背景には、家族計画においてコンドームがほとんど推奨されなかったことがある。北タイでは、一般の主婦を対象とする家族計画は、政府の人口政策の一環として1970年代から始まった（Shevasunt and Hogan 1979, p. 6）。その頃から、経口避妊薬（ピル）やホルモン注射法や避妊リングなどの避妊法が紹介され、女性たちの間に普及した。

チェンマイ家族計画協会の職員の報告によると、「避妊は女性の役割である」という認識は家族計画を施行する側にもそれを受ける側にも強く、家族計画は女性を主体に行われ、家族計画として病院や地域の保健機関がコンドームを推奨したり、夫が積極的にコンドームを使うことはほとんどなかったことが報告されている¹⁰。さらに、経口避妊薬や注射法は女性が主体的に行うことができるうえ、コンドームよりも避妊効果が高いと考える医師は多く、家族計画のカウンセリングにおいても経口避妊薬と注射法が勧められてきたことも、チェンマイ家族計画協会の「家族計画カウンセリング実施報告書」で明らかであった¹¹。これらのことから、性産業に従事していない女性にはコンドームは普及しなかった。

さらに、チェンマイ家族計画協会に勤務する医師の話によれば、エイズが蔓延するまでは、コンドームの供給はヨーロッパやアメリカからの輸入に依存しており、高価で入手が困難であったことから、医療機関で働く人や医学生などの無料で持ち帰ることができるような立場の人を除いては、一般の男性の多くは、売春宿に行ってもコンドームを使っていなかった¹²。

一般の男女に対するコンドーム普及運動は、エイズが深刻化した1987年頃から本格的に始まった。タイ政府は「コンドーム100%普及運動」（*One Hundred Condom Promotion Campaign*）を実施し、テレビやラジオを通じてコンドームの普及を呼びかけた。しかし、この頃はまだ女性性産業労働者の HIV 感染率は高くても、一般の女性にはあまり感染が広まっていなかったために、「コンドーム100%普及運動」は性産業施設で働く女性とその顧客を重点的に行われた。無料のコンドームは村のヘルスポストや区の保健センター、そして娯楽施設に配布され、性産業に通う男性と性産業で働く女性に確実に渡るような対策が政府によって講じられた。「コンドーム100%普及運動」は女性性産業労働者間の新規感染者を抑えたことから、WHO や UNAIDS などの国際機関から高い評価を得た。しかしその一方で、初期の頃のエイズ対策が女性性産業労働者とその顧客に集中したことは、コンドームに「快楽の性のためのもの」とか「病気の伝染を予防するだけのもの」という否定的な表象を付与し、夫婦や恋人のような性産業以外の男女関係におけるコンドームの普及を妨げるという重大な問題を残した。

6-2. H工業団地におけるHIV感染予防対策の諸問題

工場の女性がコンドームの使用による予防を躊躇する第二の理由は、男性にその使用を求めれば「性的に乱れたふしだらな女性」という否定的イメージを生む可能性があることである。工場の女性たちは、コンドームの使用を頼むことで、性的経験が豊富な女性だと見なされるという不利な立場にいる。若い女性が出稼ぎをするだけで性的に乱れることを懸念されるのに、コンドームを使用して積極的に感染予防をしようとするのは、彼女たちの過去における活発な性経験をいっそう疑われることになる。

工場の女性が HIV 感染予防対策をすることに、このような否定的な解釈がなされることの原因の一つに、工業団地における HIV 感染予防対策が「伝統的女性らしさ」と「近代的女性らしさ」との間で不安定に生成する彼女たちのセクシュアリティを十分に理解しないで行われてきたことがある。H工業団地では、エイズ問題に取り組む一つの国際非政府団体、L保健センター、そしてL社会労働福祉センターが共同で工場労働者に対するエイズ教育を行ってきた。その主たる目的は、コンドームの配布とコンドームの装着方法のデモンストレーションにより、コンドームの普及を図ることであった。

団地近辺の村人と同様に、これら HIV 感染予防対策を実行する人々も、工場の女性たちのセクシュアリティに対する偏見をもっていったことが推測できる。それは、「工場の女性たちは農村を離れ両親の監視が行き届かない土地で生活し、男性と軽率に性交渉をもっている反面、妊娠や HIV 感染などの、性交渉から生じるさまざまなリスクから身を守る術を知らない」という偏見である。こうして工場働く若者にエイズ予防対策を施行する人々は、女性工場労働者を今後感染リスクが高まるであろう「潜在的」ハイリスク・グループと見なし、コンドームの普及を勧めた。

しかし、実際の性交渉においてコンドームによる感染予防を行うか否かは、女性工場労働者の「個人の判断」に大きく委ねられた。つまり、女性性産業者に対する半ば強制的なコンドームの推進とは異なり、性交渉においてコンドームを使用しているかどうかを監視したり確認したりするような干渉は、彼女たちには行われなかった。一方、彼女たちへのコンドームの普及活動において、彼女たちが避妊や HIV 感染予防について男性と対等に話し合う力をもっていないことは看過されたままであった。HIV 感染予防対策を施行する人々の多くは、「性規範やジェンダーの問題は保健機関では対処できない問題である」とし、男女の不均衡な力関係についてほとんど考慮せず、コンドームの普及を勧めたのである。その結果、女性工場労働者の多くは、依然としてコンドームの使用について男性と話すことを躊躇している。

6-3. 「独占的愛」の思想とHIV感染予防の問題

女性工場労働者の多くがコンドームによる予防を行わない第三の理由は、それが彼女たちが理想とする「独占的愛」の思想と矛盾することである。彼女たちにとって、性のパートナーとなる男性は「独占的性関係」を約束した相手であり、そのような関係でコンドームの使用を求めることはその男性への不信感を示し、恋愛関係を動揺させ、さらには自分たちの理想さえも壊すことになると考えている。

しかし、「独占的關係」にあるという彼女たちの認識と実際の性的関係には、ずれがある。第4章第2節で述べたように、工場の若い男性のなかには、工場の女性を複数の相手の一人と見なしている人もいる。工場労働者の HIV 感染リスクを調査した他の研究報告においても、工場の若い女性は、工場の男性だけではなく近郊の専門学校に通う男子生徒からも、不特定多数の一人として選択され、女性性産業者の代替として見なされていることも報告されている (Cash et al. 1995; Ford and Kittisuksathit 1996; PATH Organization 1998)。また、北タイ感染症管理センターの報告では、工場の男性が恋人や女友達との性交渉においてコンドームを使用する確率は、女性性産業者との性交渉に比べて低いことも明らかになっており、工場の女性たちがきわめてリスクの高い性的関係にあることを裏づける (CDC 10 1999)。

「独占的性関係」という理想の性的関係を構築することを願う工場の女性たちの願望と、彼女たちを「快楽の性の相手」と見なす工場の男性たちの意識との違いに、彼女たちの感染リスクは生じている。工場の男性が工場の女性との性交渉においてコンドームを使用する確率が少なく、同時に複数の女性と性交渉をもつ可能性を考えると、工場の女性たちの感染リスクはきわめて高いと結論できる。

7. HIV 感染リスクと男女不平等——結語に代えて

女性工場労働者たちは、娯楽メディアが表象する性交渉を是とする異性関係に憧れ、その関係に「独占性」という条件をつけることで自分たちの婚前性交渉も正当化する。しかしその一方で、彼女たちは依然として性のダブルスタンダードが定めた規範に準じた自己像を表象しようとしている。娯楽メディアが伝える「近代的女性像」と性のダブルスタンダードにおける「良い女性像」の二つの女性像は、工場の女性たちにとってはまったく対立するものではなく、むしろゆるやかに繋がっていると考えられる。しかし、彼女たちが「伝統的な良い女性像」に束縛されている限り、男女間の性規範の矛盾は解消しないのであり、彼女たちはその不一致から生じるさまざまな性的・身体的リスクに曝され続けていると結論できる。

しかし、このような結論に工場の女性たちは異議を唱えるだろう。彼女たちが考える男女平等主義とは、女性の「正常な」セクシュアリティを「生殖役割」に限定し、女性が生殖と切り離されたセクシュアリティをもつことを否定してきた社会規範を見なおし、女性における性行動の変革を求めるような、西洋社会における「性の解放のモデル」とは異なるからである。つまり、女性が男性のように不特定多数の相手と性交渉をもつことを容認され、男性のように性的に奔放に振る舞うことで、男女間の不平等が解消できるとは、彼女たちは思っていない。むしろ、互いに「独占的な性関係」を築くことが、その性的関係における男女の立場をより平等なものへと導き、いずれは性のダブルスタンダードを変革すると彼女たちは考えている。

「女性の性行動が規制されていることは女性の性に対する抑圧ではなく、女性の身体をさまざまな危険から保護し女性の名誉を保つためである」という考えは、彼女たちの祖母や母の世代から変わっていない。H工業団地で働く女性たちの多くは、若い年齢で婚前性経験があっても、「快樂のための」性交渉をもつことを否定する。そして、性行為を自由に行う権利やコンドームを自由に要求する権利をもって男女平等が達成できるとか、あるいはそのような権利を得たいとは思っていない。規制のない性行為は、コンドームの使用を要求する力をもっていたとしてもやはりリスクの高いものだと考えている。エイズが蔓延する現代タイ社会においてむしろ大切なのは、男女が「独占的な性関係」を形成することだと考える。

確かに、彼女たちの思想がタイにおける男女関係に望み通りの変革をもたらすならば、タイの若者のHIV感染リスクは抑制できる。しかし、彼女たちのこのような願望が現実の性的関係とずれている限り、彼女たちのHIV感染リスクは発生する。

今後、H工業団地で若者たちを対象にHIV感染予防活動を実施する人々は、若者たちの間で複雑に生成するセクシュアリティを理解したうえで、彼ら/彼女たちのHIV感染リスクの軽減に取り組む必要があるだろう。

(お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程)

*本研究は、タイ国国立研究協議会(National Research Council of Thailand)の許可を得て行われた。また、1997年から現在までの現地調査は、文部省科学研究費補助金(平成10年度、平成11年度、平成12年度)、トヨタ財団研究助成金(平成11年度)、笹川科学研究助成金(平成9年度)、そして第11回日本性教育協会学術研究補助金(平成11年度)により行った。本論文を作成するにあたり、お茶の水女子大学文教育学部、波平恵美子教授のご指導を賜りましたことを深く感謝いたします。調査地においては、工業団地で働く皆様、近郊の農村に住む皆様、そして北タイ感染症管理センターを初

めとする関係機関の皆様にご教示と調査への協力をいただきました。ここに記して感謝いたします。

注

1. L保健センターエイズ対策室長との個別インタビュー（1999年7月）。
2. 主要農産物は、竜眼（Lamyai）である。
3. L保健センターエイズ対策室長との個別インタビュー（1999年7月）。
4. L保健センター、L社会労働福祉センター、北タイ感染症管理センターなど。
5. タイの人々の性規範を性のダブルスタンダードで画一的に論じる傾向は、HIV感染予防対策を講じる諸機関においても強く見られる。たとえば、L保健センターやL社会労働福祉センターにおいても、女性工場労働者の婚前性交渉をタイの「伝統的性規範」から逸脱したものと捉え、婚前性交渉を行う女性には、女性性産業労働者と同様に、コンドームによる予防を徹底させなければならないと考えた。
6. L社会労働福祉センターの報告によると、H工業団地で働く工場労働者の約70%は北タイの出身である（1999年7月）。
7. 北タイにおける祖霊崇拝の先行研究においても、祖霊崇拝が女性の性を管理するだけでなく、女性とその親族にとって肯定的な役割をもっていたことが論じられている。たとえばディラニー（Delaney）は、「償いの儀礼」は、娘の両親が、娘と性交渉をもった男性を自分たちの祖霊集団の一員とする儀礼であると論じている（Cohen and Wijeyewardene 1984, p. 261）。また、ヘイル（Hale）は、祖霊崇拝は男性の性行動を抑制し、未婚の若い女性の身体を男性からの不正な性行為から守る役割があると論じている（Cohen and Wijeyewardene 1984, p. 261）。
8. Mills は、1987年から1990年の間に、東北タイの農村からバンコクに出稼ぎをする若い女性たちの生活世界についての研究を行った。
9. Cash et al. 1995; Ford and Kittisuksathit 1996; PATH Organization 1998.
10. チェンマイ家族計画協会の職員との個別インタビュー（1999年7月）。
11. チェンマイ家族計画協会が所蔵する、過去15年間の、同協会における家族計画のカウンセリングの実施経過をまとめた報告書によると、コンドームはほとんど推奨されていなかった（1999年7月の現地調査）。
12. チェンマイ家族計画協会専属医師との個別インタビュー（1999年7月）。

参考文献

- Atkinson, Jane M. and Shelly Errington, eds. *Power and Difference: Gender in Island Southeast Asia*. Stanford: Stanford University Press, 1990.
- Boonchalaksi, Wathinee and Philip Guest. *Prostitution in Thailand*. Bangkok: Mahidol University, 1994.
- Cash, Kathleen. Bupa Anansuchatkul and Wantana Busayawong. *Experimental Educational Interventions for AIDS Prevention among Northern Thai Single Migratory Factory Workers*. Women and AIDS Research Program, no. 9. International Center for Research on Women, 1995.
- Cohen, Paul T. and Gehan Wijeyewardene. "Introduction: Spirit Cults and the Position of Women in Northern Thailand." *Mankind*, special issue 3, 14 (4): 249–262, 1984.
- Fongkeaw, Warunee. *Early Adolescent Girls in Transition in a Peri-urban Northern Thai Community: Perceptions of Gender Role and Sexuality*. Ph.D. Dissertation, University of Washington, 1995.
- Ford, Nicholas and Sirinan Kittisuksathit. *Youth Sexuality: The Sexual Awareness, Lifestyles and Related-Health Service Needs of Young, Single, Factory Workers in Thailand*. Institute for Population and Social Research, Mahidol University, 1996.
- Ford, Nicholas and Suporn Koetsawang. "The Socio-Cultural Context of the Transmission of HIV in Thailand." *Social Science & Medicine*, 33 (4): 405–414, 1991.
- Knodel, John et al. "Thai Views of Sexuality and Sexual Behavior." *Health Transition Review*, 6: 179–201, 1996.
- Lytleton, Chris. "Messages of Distinction: The HIV/AIDS Media Campaign in Thailand." *Medical Anthropology* 16: 363–389, 1996.

- Mills, Mary B. *Thai Women in the Global Labor Force*. New Brunswick: Rutgers University Press, 1999.
- Muecke, Marjorie A. "Mother Sold Food, Daughter Sells Her Body: The Cultural Continuity of Prostitution." *Social Science & Medicine*, 35 (7): 891–901, 1992.
- Muntarbhorn, Vitit et al. *Status of Women: Thailand*. Bangkok: UNESCO Principal Regional Office for Asia and the Pacific, 1990.
- Office of Communicative Disease Control Region 10, Chiang Mai (CDC 10). A Report presented to an AIDS Trainer's Workshop in Chiang Mai, organized by Faculty of Nursing, Chiang Mai University, 1999.
- Ong, Aihwa and Michael G. Peletz, eds. *Bewitching Women, Pious Men: Gender and Body Politics in Southeast Asia*. Berkeley: University of California Press, 1995.
- PATH Organization. A Final Report on Adolescent Sexual Behavior (in Thai), 1998.
- Shevasunt, Somphong and Dennis Hogan. *Fertility and Family Planning in Rural Northern Thailand*. The Community and Family Study Center, the University of Chicago, 1979.
- Sumalee Bumroongsook. *Love and Marriage: Mate Selection in Twentieth Century Central Thailand*. Bangkok: Chulalongkorn University Press, 1995.
- Truong, Than-dam. *Sex, Money, Morality: Prostitution and Tourism in Southeast Asia*. London: Zed Books, 1990.
- Turton, Andrew. "People of the Same Spirit: Local Matrikin Groups and their Cults." *Mankind*, special issue 3. 14 (4): 272–285, 1984.
- Van Esterik, Penny and John Van Esterik, eds. *Gender and Development in Southeast Asia*. Canada: Canadian Council for South East Asian Studies, 1991.
- Weniger, Bruce et al. "The Epidemiology of HIV Infection and AIDS in Thailand." *AIDS* 5 (supplement 2): S 71–85, 1991.